看護職部門

大切なものさしをいただいた涙

【矢向（やこう） 美千世（みちよ）・神奈川県】

第3回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 入選

「あなたがやれ、やれと言うことは、僕が今までやむなく捨ててふたをしてきたものを一つ一つ引っ張り出して並べて見せられているのと同じだ」

これは訪問看護師として働き始めて2年目の私に向けられた怒りの言葉。

長年心臓を患ってこられたMさんは、当時私が担当していた利用者さんだった。幼いころから人生のさまざまな場面で悔しい思いを体験してきたとよく話してくださった。その逆境にも屈せず生き抜いてこられた姿にいつも尊敬の念を抱いていた。しかし、リハビリに対して衰えを口にされ徐々に消極的になっていく姿に、いつしか「昔のMさんは前向きだったのに。もっとやれるはず」と思うようになった。

そんな私に苦痛を感じておられたのだろう。ある日、温和なMさんが突然声を荒げ怒鳴ったのだ。私はぼうぜんとしながらも、今まで伺ってきた数々のエピソードが一気に頭の中に駆け巡った。「Mさんに昔と同じ心の痛みを味わわせていたなんて…」と思った瞬間、どっと涙が出てきた。必死に止めようと思ってもとめどなく涙がこぼれた。

今まで不快な思いをさせていたこと、その上、泣いてしまったことをひたすらわびてMさん宅を後にした。もう二度と私の訪問は許されないだろう、そう思った。

しかし、後日、「看護師さんっていうのは人のために泣くことができるんだね」という思いがけない言葉とともに訪問が許された。Mさんは「平行線でもいいじゃないですか。これからも曲げないかもしれないけれど、僕にとって言ってもらうことは大事だから、声掛けはやめないでくださいよ」とおっしゃった。笑顔だった。

看護師としての思いを大切にしながらも決して自分の価値観を押し付けずに関わってほしい。それが真に相手を理解し尊重することにつながると気付かせてくれたのだ。Mさんが亡くなられて10年以上たつ。今も私に看護師として人と向き合う姿勢を教えてくれる、忘れられない思い出である。